

# セネガルのイスラーム教団ムリッドにおける「バイファル」

—バイファルの宗教生活に対する人類学的調査—

平成 26 年入学

派遣先国：セネガル共和国

池邊 智基

・キーワード：セネガル、イスラーム、ムリッド教団、宗教儀礼

## ・対象とする問題の概要

筆者の関心は、セネガル共和国のスーフイー<sup>1</sup>、ムリッド教団<sup>2</sup>に存在する、「バイファル Baye Fall」と呼ばれる集団だ。バイファルはムリッド教団の創始者アマドゥ・バンバ（1850-1927）の最初の弟子である、イブラ・ファル（1858-1930）が作った集団である。「労働」を教義とし、マラブーと呼ばれる指導者に仕え、身の回りの世話や種々さまざまな雑務をこなし、働く。彼らはドレッドロックスのヘアースタイルにカラフルな継ぎ接ぎの身なり、いくつものクルース（数珠）やマラブーの写真を首からさげている。その奇抜な身なりに加えて、「働く代わりに祈りや断食をしない」といった、他のイスラーム地域が持たない「異端」な特徴もある。

現在、バイファルに関する研究や記述はいくつか残っているが、バイファルの人類学的な研究は少なく、祈らず働く行為がセネガルのムスリム社会にもたらす影響についての研究も、細くなくない。さらにバイファルを騙り、マリファナや酒を買うため人々に金をせびる「偽バイファル」が都市化の影響で増えている。祈らないというマイナスイメージに加え、「偽」のイメージばかりが語られ、敬虔なバイファルの語りよりも「偽」の記述が目立つ。バイファルの宗教生活を人類学的に考察することで、「異端」や「偽」と記述されているバイファルのイスラーム的意義を明らかにし、「真」のバイファルとは何かを描こうと考えた。

## ・研究目的

筆者はバイファルの人類学的調査に向けて、以下の2つの研究目的を持ち、フィールドワークを行った。

ひとつは、労働を教義とするバイファルの宗教的生活を観察し、バイファルが担う社会的・宗教的役

---

1 スーフイー：「イスラーム神秘主義」とも呼ばれ、神との合一のため、イスラームの教えを精神的に探求し修行する人々を指す。

2 ムリッド教団：19世紀末より農耕民ウォロフを基礎として成立したセネガルのスーフイー教団。「労働」と「祈り」を教義の基礎とし、現在も急速に拡大している。

割を分析することである。「祈る時間もないほどに働く」というムスリムの中でも「異端」な特徴があるバイファルが、イスラームの教えを「無視」することで何をなし遂げようとしているのか。そこで、バイファルの「労働」の内実に注目した。

そしてもうひとつは、宗教儀礼を行う場に参加し、儀礼が行われる過程をデータとして録音、撮影を行うことであった。バイファルの儀礼は、太鼓を使って歌い踊る「ズィクル」を基本とする。彼らはムスリムの五行のひとつである1日5回の「祈り」をしないが、歌うことで祈るとされている。バイファルの宗教的生活において重要な位置を占める「歌う」儀礼をデータとして保存するため、儀礼の場への参加を試みた。

### ・フィールドワークから得られた知見について

今回の渡航は2014年10月2日から11月30日の約2ヶ月間であった。フィールドワークは、首都ダカールのサンダガ市場で主に行った。

サンダガ市場では、集金活動を行うバイファルを多く見ることができ、彼らとのコミュニケーションを通して調査を行うことができた。「マジヤル」と呼ばれるその行為は、マラブーとその弟子たちのためにお金を集め、彼らの生活に必要な米、砂糖、牛を買う。瓢箪からつくったクルと呼ばれる器を持ち、行き交う人々に小銭を求める。集金活動は朝10時頃から夕方18時頃まで行われており、その間1度としてバイファルが祈りを行うことはなかった。

集金活動のほかに、バイファルの「ズィクル」を、都市共同体の集会「ダイラ」の中で観察した。ズィクルは、バイファルが輪になり、反時計周りに動きつつ歌う。全体の進行役「ドゥベ」が歌い、全員がその後続く。ドゥベが調子を変えることもあり、ズィクルに緩急が生まれる。

歌は「ラーイラーハイッラッラー（アッラーのほかに神はなし）」を繰り返す。バイファルのコミュニティを作ったイブラ・ファルは歌いながら森を開墾し、ムリッド教団の創始者アマドゥ・バンバのための労働を行ったとされている。インフォーマントのバイファルによれば「祈りを捨ててまで働くが、その精神は神と共にある」というのだ。祈りを蔑ろにするのではなく、労働し歌うことで普段行わない祈りを補完すると考えているようだ。

また、ティエス州ンブール県、ジュルベル州ンバケ県、ルーガ州ケベメル県に移動し、ダカール以外の調査地を選定する作業も兼ね、予備調査を行った。農村に住むバイファルの生活を観察したところ、都市ではあまり目にしないヒン（太鼓）やドゥカット（バイファルのダンス）を観察することができた。「村にいるのが、本当のバイファルだ」と語る村民も多くいたことから、村内の伝統を受け継いでいるバイファルと、都市に生まれ都市に暮らすバイファルとの隔たりを感じた。現代のバイファルを研究するためには、都市と農村の両地点で参与観察を続け、違いを比較分析することも必要と考える。

## ・今後の展開・反省点

本渡航ではバイファルの人類的調査に向けて、概観を捉えることができた。しかし、予備的な調査にとどまった点も多く残る。上述の農村における調査や、集金活動以外のバイファルの労働など、これからも参与観察を続けていき、今後の研究の視座を広げていきたい。

また、今後の展開として、ラマダーン期におけるバイファルの宗教的实践についても調査したい。本渡航中、ラマダーン期間中にバイファルは断食をするムスリムのために食事を用意するという情報を得た。どのような食事をいつどのように作り、与えているのかなど、細かく調べていきたい。またラマダーン中の儀礼も特徴的なものが行われるという情報を得たので、これについても詳しく調べたい。



(画像1：ダカール、サンダガ市場で集金活動をするバイファル)



(画像2：サンダガ市場、ポンピドゥー通りのダイラで輪になり、ズィクルを歌うバイファル)



(画像3: ケベメル州 N 村のバイファルたち。イスラーム暦の正月にあたるタムハリット Tamkharit の準備に、男たちで牛を屠る。)